受容予期とコミットメントが社会的拒絶への対処行動に及ぼす影響

—愛着スタイルによる差異の検討—

○宮崎 弦太, 池上 知子

(大阪市立大学大学院文学研究科)

キーワード: 社会的拒絶への対処行動、受容予期、愛着スタイル

Effects of expectation of acceptance and commitment on coping behaviors for interpersonal rejection: Differences by attachment style.

Genta MIYAZAKI & Tomoko IKEGAMI

(Graduate School of Literature and Human Sciences, Osaka City University)

Key words: coping behaviors for interpersonal rejection, expectation of acceptance, attachment style

問題と目的

親密な関係相手からの拒絶に対して関係修復的な行動をとることは、所属欲求を充足するうえで有効な対処方略である。しかし、その方略には、相手から再び拒絶され自己が傷つけられるリスクが伴う。Murray et al. (2006) のリスク制御理論によれば、そのようなリスクに対応するため、私たちは、相手が自分に対して受容的に応答してくれることを予期できるかどうかによって、関係修復の対処を行うか否かを制御していると考えられる。事実、宮崎・池上(印刷中)は、関係相手からの受容予期が強いほど、拒絶に対して関係修復的な対処行動が動機づけられやすいことを明らかにしている。これに加え、受容予期が関係へのコミットメントを強めることを通して、関係修復的な対処を促進するという間接的な影響過程の存在も明らかにしている。

ただし、受容予期が、関係修復的な対処やコミットメントを常に促進するとは限らない。成人愛着理論の研究では、愛着不安の高い人は、他者から受容されることを強く希求するあまり、相手からの受容を過剰に期待することが知られている(Mikulincer & Shaver, 2007)。さらに、愛着不安に起因する受容への期待は、これを覆す拒絶に対して自己を脆弱にすることが、宮崎・池上(2008)によって示されている。したがって、愛着不安が高い場合、受容予期が強いほど自己防衛的な対処(e.g., 回避や攻撃)が行われやすいと予測される。また、拒絶への懸念を常に抱いているため、受容予期が関係内での安心感に結びつかず、コミットメントを強めることを通して関係修復行動を促進する可能性も低くなると考えられる。

以上より、本研究は、受容予期が生じる心理的背景が愛着スタイルによって異なることに注目し、受容予期が適応的に機能するための条件を明らかにすることを目的とする。

方法

調査参加者 大学生 178 名(男性 96 名、女性 82 名)。

手続き 場面想定法による質問紙調査を行った。愛着スタイルの測定尺度に回答してもらった後、最も親しく付き合っている同性の親友を 1 名挙げてもらい、受容予期とコミットメントの測定尺度に回答を求めた。その後、親友からの拒絶場面(i.e., 親友から無視される)をシナリオによって想起させ、その場面での感情と行動を尋ねる尺度に回答してもらった。

測度 1) 愛着スタイル(愛着不安と愛着回避): 一般他者版の ECR(中尾・加藤, 2004) から、それぞれ 8 項目を選出し、7 件法で回答を求めた(不安、 $\alpha = .87$; 回避、 $\alpha = .78$)。2) 受容予期: 宮崎・池上(印刷中)と同様、相手への要請場面で相手の受容的応答を予期する程度を 6 件法で尋ねた(5 項目、 $\alpha = .79$)。3) コミットメント: Arriaga & Agnew (2001) の尺度から 6 項目を選出し、7 件法で回答を求めた($\alpha = .72$)。3) 被拒絶感: Downey & Feldman (1996) に基づき、親友からの拒絶場面で被拒絶感をどの程度感じるかを 7 件法で尋ねた(3 項目、 $\alpha = .79$)。4) 拒絶への行動反応: Rusbult et al.

(1982) と宮崎・池上(印刷中)を参考に、親友からの拒絶場面で関係志向的行動(8 項目、 $\alpha = .79$)、積極的な関係破壊的行動(5 項目、 $\alpha = .73$)、消極的な関係破壊的行動(5 項目、 $\alpha = .88$)をどの程度行うかを 7 件法で尋ねた。

結果と考察

操作チェック 被拒絶感得点($M = 6.11, SD = 1.03$)は中点(4)よりも有意に高く($t(174) = 27.13, p < .001$)、シナリオの有効性が確認された。

階層的重回帰分析 予測を検証するため、拒絶に対する行動反応の各得点を目的変数とし、第 1 ステップで中心化した愛着不安、愛着回避、受容予期、コミットメント、第 2 ステップで 2 要因交互作用、第 3 ステップで 3 要因交互作用を投入する階層的重回帰分析を行った。いずれの得点についても、第 2・第 3 ステップでモデルの説明率が有意に上昇しなかったため、第 1 ステップの結果を Table 1 に示した。予測とは異なり、愛着の各次元とは独立に、強い受容予期とコミットメントは、拒絶に対する関係志向的行動を促進し、積極的および消極的な関係破壊的行動を抑制していた。

Table 1. 第 1 ステップにおける各変数の標準偏回帰係数

	関係志向的行動	積極的な 関係破壊的行動	消極的な 関係破壊的行動
愛着不安	.21 **	.21 **	.05
愛着回避	-.15 *	-.13 †	.09
受容予期	.26 **	-.32 ***	-.23 **
コミットメント	.26 **	-.22 **	-.34 ***
調整済み R^2	.28 ***	.22 ***	.28 ***

† $p < .10$, * $p < .05$, ** $p < .01$, *** $p < .001$ 。

次に、受容予期からの間接的な影響に愛着スタイルによる差異がみられるか否かを検討するため、コミットメントを目的変数とする階層的重回帰分析を行った。その結果、不安×回避×受容予期の 3 要因交互作用が有意であった($\beta = .16, p < .05$)。そこで、愛着の各次元の±1SD の組み合わせごとに受容予期の単純傾斜を算出し、Table 2 に示した。予測通り、受容予期がコミットメントを促進する傾向は、安定型で最も強く現れており、とらわれ型では認められない。

Table 2. 受容予期の単純傾斜効果(標準化偏回帰係数)

目的変数:	安定型	とらわれ型	回避型	恐れ型
コミットメント	不安-1SD 回避-1SD	不安+1SD 回避-1SD	不安-1SD 回避+1SD	不安+1SD 回避+1SD
受容予期	.83 ***	.23	.33 **	.41 **

** $p < .01$, *** $p < .001$ 。

以上より、親密な繋がりを強く求めながらも、拒絶により自己が傷つくことへの懸念が強い人では、関係相手からの受容予期が拒絶への関係修復的な対処行動を促進するプロセスの一部が機能しないことが示唆される。

付記 本研究は平成 21 年度文部科学省科学研究費補助金(特別研究員奨励費、課題番号 20・8727)の助成を受けて行われた。